

論文の内容の要旨

論文題目 興味の深まりを可能にする趣味縁に関する研究：余暇研究と学習科学の
融合的アプローチから
氏名 杉山昂平

本論文は、余暇研究と学習科学を融合したアプローチから「趣味人の興味の深まりは、趣味縁を織り込んだ趣味への参加の仕方によって、いかにして可能になっているのか」を検討したものである。特に、アマチュアオーケストラを事例にして実践共同体という強固な趣味縁の働きを調査・分析し、アマチュア写真を事例にして実践ネットワークという緩やかな趣味縁の働きを調査・分析した。これらの結果を統合することを通して、楽しみを制約する社会的世界だけでなく楽しみを促進する社会的世界についての理解を深め、楽しみを支えるために私たちに何ができるのか、示唆を得ることが企図されている。

本論文は全5章で構成されている。まず、第1章において研究の問題関心を位置付けたうえで、第2章では視座と問いを設定した。そして、第3章・第4章において実証的な調査と分析を行い、そこから得られた結果を第5章において考察し、結論としてまとめている。各章の具体的な内容は以下の通りである。

第1章「趣味を支える知に向けて」では、本論文で扱う「趣味」の定義を行い、趣味研究の動向をレビューしたうえで、その中でもどの知見に注目するのかを論じた。本論文では余暇研究におけるシリアスレジャー概念に依拠し、趣味を「専門的な楽しみ方をする余暇活動」と定義している。このような意味での趣味に関する研究は、「趣味の歴史的背景」「趣味の専門的な楽しみ方」「趣味と家庭生活・仕事との対立や調整」「趣味のもたらす効果」といった主題を扱っていた。これらの中でも余暇研究を中心とした「趣味の専門的な楽しみ方」に関する研究は、趣味が社会的世界に依拠して行われることを明らかにしている。これは特に、趣味人の置かれた環境によって楽しみが制約される過程として描かれていた。だが一方で、楽しみが促進される過程は十分論じられていなかった。楽しみの制約について理解を深めるだけでは、楽しみを支えるには不十分である。楽しみがいかにして促進されるのかが明らかでない場合、楽しむことは運良く優れた社会環境に巡り会えた人だけが享受するものになるだろう。そこで本論文では、こうした趣味研究の現状を課題として捉え、「趣味における楽しみを促進する社会的世界」を分析・記述することを問題関心として位置付けた。

第2章「社会文化的学習としての興味発展への着目」では、第1章の問題関心を受けて学習科学を融合するアプローチを採用し、学習科学における興味発展の理論枠組みを導入した。そして、これを趣味に適用した先行研究の知見を整理したうえで、新規な知見を生み出すための本論文の方針を論じた。楽しみが促進される過程を分析・記述する上で、学習科学は有効な分野だと考えられた。なぜならば、楽しみの促進とは「楽しめるようにな

る」過程を意味し、それは活動の面白さを見いだすという点で、学習科学の言う興味発展に近いからである。学習科学では興味の人—対象理論に基づき、「個人が特定の対象と持続的でポジティブな感情が伴った関係性を結ぶこと」を興味発展と捉えている。また、社会文化理論に基づき、このような興味発展は他者やモノによって織り成された実践への参加の仕方によって可能になると考える。実際、主に科学趣味における興味発展を対象とした学習科学研究は、趣味のクラブから道具や用品まで、社会的世界に存在する様々な資源が興味を支えていることを明らかにしていた。これらの先行研究に対して、本論文では「個々の趣味人による興味の深まりに依拠する」「興味の深まりを可能にする趣味縁に焦点化する」という方針を立てた。すなわち、あらかじめ特定の場に限定するのではなく、個々人の趣味のライフストーリーに注目し、その中で趣味の新たな面白さを理解し、楽しみが促進される過程が、趣味の社会的世界に存在する他者とのどのような関係性のもとに可能になったのかを検討するというものである。

第3章「興味の深まりを可能にする実践共同体：アマチュアオーケストラ団員を事例に」では、趣味縁の中でも「特定の活動に共同かつ持続的に従事することで実践を織り成す関係性」である実践共同体を扱った。具体的に論じたのは、アマチュアオーケストラ団員調査の方法と結果である。アマチュアオーケストラは楽団という組織によって実践される趣味であり、実践共同体の性質を検討する上で有効な事例だと考えられる。15人のアマチュアオーケストラ団員の方々に協力を得て興味の深まりとその契機に関するインタビュー調査を行い、語りの中に見られた実践共同体との関わりを分析した。その結果、次のことが明らかになった：「興味の深まりを可能にする実践共同体には、『既存の所属団体』に加え、『外部の個人指導者』との関係性や『異質な新所属団体』があること」「既存の所属団体では、団の役職構造において必要となる職務を遂行したり、そうした構造を職場と比較したりすることや、熱心な仲間からの期待に応えることとして新たな挑戦課題に取り組むよう要求されることが、興味の深まりを可能にすること」「一方で、既存の所属団体に在籍し続けることは習慣からの逸脱を困難にし、活動の停滞を引きおこし得ること」「それゆえ、外部の個人指導者が開くレッスンを受講することで既存の活動を相対化したり、異質な新所属団体に移籍した結果可能になるロールモデルの観察や、対照的な活動への参加によって既存の活動には欠けていた側面を認識したりすることも、興味の深まりを可能にすること」。

第4章「興味の深まりを可能にする実践ネットワーク：アマチュア写真家を事例に」では、趣味縁の中でも「共同かつ持続的な従事を行わないものの間接的あるいは偶発的なコミュニケーションによって実践を織り成す関係性」である実践ネットワークを扱った。具体的に論じたのはアマチュア写真家調査の方法と結果である。アマチュア写真は一人で行える趣味であると同時に、SNS等のデジタルテクノロジーによってネットワークを形成しやすい環境が醸成されているため、実践ネットワークの性質を検討する上で有効な事例だと考えられる。14人のアマチュア写真家の方々に協力を得て興味の深まりとその継起に

関するインタビュー調査を行い、語りの中に見られる実践ネットワークとの関わりを分析した。その結果、次のことが明らかになった：「興味の深まりを可能にする実践ネットワークには、『刺激的な隣人』と『不特定の観衆』があること」「刺激的な隣人と互いの様子がうかがえる近さで単独制作に打ち込んだり、模倣したくなるほどの威光をメディアを通して感じたりすることを通して、直接的なコミュニケーションはなくとも同じ趣味に打ち込む多様な趣味人を目にすることができること」「不特定の観衆からは、SNSやギャラリーにおいて活動性かを発表することで反応を得られること」「このように多様な趣味人が可視化されることや観衆からの反応を得ることはそれ自体が深い興味対象となり興味の深まりを可能にする一方で、それだけでは興味が深まらない場合もしばしばあること」「その場合、刺激的な隣人や不特定の観衆に触発された後、趣味人自らが表現の自己探索を行うことが興味の深まりを可能にすること」。

第5章「興味の深まりを可能にする趣味縁の姿」では、第3章・第4章の結果を統合したうえで「趣味人の興味の深まりは、趣味縁を織り込んだ趣味への参加の仕方によって、いかにして可能になっているのか」への答えをまとめた。また、そこから得られる示唆と今後の課題を論じた。アマチュアオーケストラ団員調査およびアマチュア写真家調査の結果から明らかになったことは次の通りである：「実践共同体と実践ネットワークは共に、新しい興味対象に出会う可能性を意図せず創出する」「そうした可能性の創出は、実践共同体の場合まず共同活動に趣味人を巻き込むことで行われるが、実践ネットワークの場合は個人的探究を触発することで行われる」「また、可能性の創出は、単体の実践共同体や実践ネットワークだけでなく、実践共同体や実践ネットワークの連鎖によって行われることもある」。趣味縁は趣味人の興味を深めるために存在する教育的関係性ではないが、共同活動に巻き込んだり探究を触発したりすることで、結果として、興味の深まりを可能にするのである。こうした趣味縁の性質は、趣味人同士の互恵的支援や社会教育・生涯学習支援を通して、楽しみを促進するために役立てられるだろう。一方で、本研究が十分取り組んでいない主題として「趣味縁に関する領域固有性の検討」「興味を阻害する趣味縁を含めた生態系の把握」「興味の深まりを可能にする物質・空間の分析」「単一の趣味の継続を前提としない領域横断的な興味発展の分析・記述」「興味支援における主体性の探索」が挙げられる。今後、これらの研究課題に取り組むことで、楽しみを支える趣味研究が発展していくことが期待される。